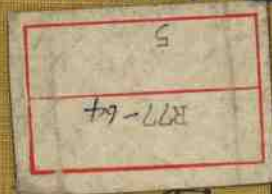


國際色盲檢查表



東京大学名誉教授

石原 忍 著

普及版

12表

昭和30年度版



金原出版株式會社

東京・京都

國際色盲檢查表

東京大學名譽教授
醫學博士

石 原 忍



東京 金原出版株式会社 京都

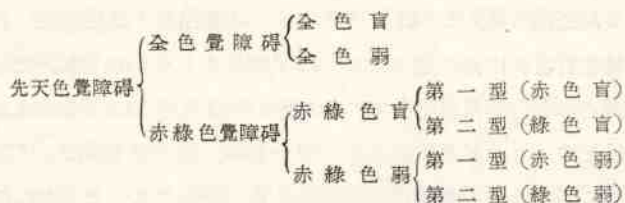
國際色盲検査表

醫學博士 石 原 忍

この表は色覚障碍の最も普通の型であるところの先天色覚障碍を、速かに、かつ確實に發見する目的で考案されたものである。

それゆゑ、この目的にただ從屬的の意義しか有しない後天色覚障碍は顧慮されなかつた。なぜならば後天色覚障碍は視束や網膜などに疾患がある時に現われる症狀で、通常、同時に他の一層重い眼障碍、例えば視力障碍などがあるからである。

先天色覚障碍には、全色覚障碍と赤綠色覚障碍とあつて、この各々に色盲と色弱とがある。



先天色覚障碍のうち、全色盲は極めて稀に見られるもので、視力が著しく悪く、そのうえ羞明や眼球振盪症があるから、實際には色盲検査の必要はない。全色弱は赤綠色覚の障碍と同時に、青黄色覚も減弱しているもので、これまで一般に、赤綠色覚障碍の中に入れられていたけれども、この色盲検査表が發明されて以來、これを赤綠色覚障碍から區別することが出来るようになった。

全色弱者は、色覚障碍より外には全く異狀がなく、かつ鮮明な

色彩はこれを感じし得るものである。

赤緑色覚障碍は先天性覚障碍の最も普通の型で、わが國に於ては、總ての男子の 4~5%がこれである。女子には少ない。そして第一型（赤色覚障碍）と第二型（綠色覚障碍）とに區別される。赤綠色盲第一型（赤色盲）は「スペクトル」の赤色の部と青綠色の部に無色帯があつて、その部は無色に見え、かつ赤色は暗く見える。従つて「スペクトル」の赤の端は短縮して見え、無色帯（青綠色の部）を境界として、一方には、ただ黄の一色、他方には、ただ青の一色が見える。赤綠色盲の第二型（綠色盲）は「スペクトル」の綠色の部に無色帯があつて、これを境として、一方には、ただ黄の一色、他方には、ただ青の一色のみが見える。綠色の補色である紫色も、また無色に見えるが、「スペクトル」は短縮しては見えない。

赤綠色盲者には前に述べたように「スペクトル」のうち、ただ黄と青との二色のみが見えて、その他の色は見えない。そたゆえ赤と緑とは、ときどき看誤ることがあるが、黄と青とは決して間違えることはない。赤綠色弱は赤綠色盲の輕度なもので、これにも第一型（赤色弱）と第二型（綠色弱）との區別がある。赤綠色弱の特徴は、赤綠色盲と同様に、赤緑の色に比べて、青黄の色が著しく明瞭に見えることである。そしてこの特徴を色碍検査に應用したことは、この表が他の色盲検査表と異つてゐる所である。

なおこの表が 1933 年の第十四回國際眼科學會で、一般に身體検査のときに使用すべきものとして推薦されたことは、まことに望外の光榮である。

表 の 説 明

1. 健康者も、色盲者も、色弱者も、共に 12 と読む。
2. 健常者は 8 と読み、赤緑色盲者及び赤緑色弱者は 3 と読み、全色弱者は兩字とも読み得ない。
3. 健常者は 29 と読み、赤緑色盲者及び赤緑色弱者は 70 と読み、全色弱者は兩字とも読み得ない。
4. 健常者は 5 と読み、赤緑色盲者及び赤緑色弱者は 2 と読み、全色弱者は兩字とも読み得ない。
5. 健常者は 74 と読み、赤緑色盲者及び赤緑色弱者は 21 と読み、全色弱者は兩字とも読み得ない。
6. 健常者には 6 と読めるけれども、赤緑色盲者、赤緑色弱者及び全色弱者には多くは読めない。
7. 健常者には 45 と読めるけれども、赤緑色盲者、赤緑色弱者及び全色弱者には多くは読めない。
8. 健常者には 5 と読めるけれども、赤緑色盲者、赤緑色弱者及び全色弱者には多くは読めない。
9. 健常者には 16 と読めるけれども、赤緑色盲者、赤緑色弱者及び全色弱者には多くは読めない。
10. 赤緑色盲者及び赤緑色弱者には多くは 5 と読めるけれども、健常者及び全色弱者には多くは読めない。
11. 赤緑色盲者及び赤緑色弱者には多くは 45 と読めるけれども、健常者及び全色弱者には多くは読めない。

12. 赤緑色盲者のうち、赤色盲者は6の一字を読み、緑色盲者は9の一字を読み、赤緑色弱者及び健常者は兩字とも読み得る。

一 覧 表

表の番號	健 常	赤 緑 色 盲		赤 緑 色 弱	全 色 弱
		赤色盲	緑色盲		
1	12	12		12	
2	8	3		3	／
3	29	70		70	／
4	5	2		2	／
5	74	21		21	／
6	6	／		／	／
7	45	／		／	／
8	5	／		／	／
9	16	／		／	／
10	／	5		5	／
11	／	45		45	／
12	96	6	9	96	

斜線は讀めないもの、空欄は不定のものを示す。

使 用 法

検査はこの表を開き、被検者をその前に立たせ、およそ 75 センチメートルより近くない距離で、表の面が、視線とほぼ垂直に

なるようにして、これを見せるのである。そうすると、その読みかたと、曲線のたどりがたとによつて、容易に、健常者と、色盲及び色弱者とを判別することができる。

12 表の検査は、通常省略してもよいが、ただ一層、精密に色覚障碍の種類及び程度を判定する必要があるときに、これを使用するのである。

詐偽を豫防するためには、表の順序及び向きをいろいろ變えて検査するとよい。表の正しい順序と向きは、各表の裏面に印刷してある數字を見ればわかる。

この表を使用する者は注意して、必要以外には、なるべく表を閉じて置くがよい。光に遇えば、すべての色は自然に褪色するものである。また色盲検査は必ず晝間、明るい室内で行なうべきもので、直射日光や人工光線は検査に適しない。

